

森の通信

Museum and Cultural Institutions of Miyazaki Prefecture

宮 崎 県
総合博物館だより
第 16 号

発行日/平成 5 年 6 月 1 日

発行 / 宮崎県総合博物館 〒880 宮崎市神宮 2 丁目 4 番 4 号 TEL (0985) 24-2071

パリー 生きる 歓び

ジュネーブ フチ・パレ美術館名作展

ジュネーブ、フチ・パレ美術館は、芸術によって平和をもたらそうと提唱しているオスカー・ゲーズ氏の確固とした信条に基づいて1968年に開館した比較的新しい美術館ですが、充実した近代ヨーロッパ絵画のコレクションで知られています。その収集の基本となるものは1880年あたりから、第二次世界大戦前の1930年までのパリにおいて制作された作品です。それは印象派、後期印象派、ナビ派、フォービズム、キュビズムやモンマルトルの画家たち、そしてエコール・ド・パリの画家たちまで、パリが芸術創造の中心地であった時代にパリに生きた画家たちの作品です。

この展覧会ではこれら所蔵品の中から、ルノワール、ユトリロ、キスリング、藤田嗣治、ローランサンなどの名作約100点を厳選し、これを「パリー生きる歓び」という大きなテーマのもとに、「モンマルトルの仲間たち」「パリの街角」「モンパルナスの仲間たち」「画家とモデル」という4つのセクションに分けて展示します。パリに生きる市井の人々の暮らしぶりや、芸術家とその友人との交友のありさま、そして画家のモデルとなった女性たち、画家が描いたパリの風景など、それぞれの作家の多様で独自の表現を紹介するものです。

(家中)



「赤い服を着たモンパルナスのキキ」モイーズ・キスリング

会 期

平成 5 年 6 月 12 日(土)～ 7 月 18 日(日)

午前 9 時～午後 5 時(入館は午後 4 時 30 分まで)
休館日＝毎週月曜日

入館料

大 人 900円(700円) ※ ()内は前売・団体
高・大生 600円(400円) (20名以上)の料金
小・中生 400円(200円)

宮崎のコメツツジ類

日本にはコメツツジ類（宮崎でヒュウガコメツツジの名で栽培されるものはフジツツジといい、コメツツジ類ではない）が3種あります。コメツツジ（北海道～九州）、オオコメツツジ（日本海側）およびチョウジコメツツジ（中部山岳地帯）です。宮崎県にも従来からコメツツジの自生が確認されていました。

最近、宮崎県内のコメツツジ類に2型があることがわかり、花の外形、おしべの長さ、葯の形、葉の形、葉の毛や腺毛などについて日本産の他の種と比較検討しました。その結果、これらの2型はいずれも日本産の他の種と明らかに異なることがわかり、「ツクシコメツツジ」と「イチフサコメツツジ」として新しく命名することになりました。

ツクシコメツツジは宮崎県と大分県の県境に広がる岩場の多い山岳地帯に、イチフサコメツツジは熊本県境の山地に自生しています。花は白く、米粒ほどしかありません。いずれも、他のコメツツジ類がこれらの山地で隔離され、種分化したものと考えられます。自生地保護が望まれます。

（南谷）



ツクシコメツツジ



イチフサコメツツジ

中近世の器

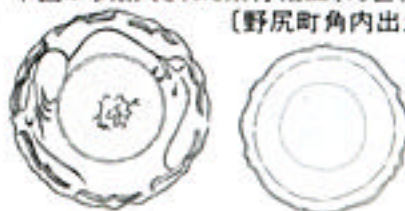
私たちが、日頃なにげなく使っている陶器や磁器は、およそ1万年にもおよぶ日本の器（うつわ）の歴史からみれば、きわめて新しい器といえることができます。

上釉のかかった、美しい光沢の碗や皿を初めて目にした人々は、宝物を手にしたような気持ちになったかもしれません。まして、それが中国舶来のものであれば、なおさらだったことでしょう。近年、本県でも備前焼・常滑焼をはじめとする中世の国産陶磁器に混じって、青磁・白磁・染付など中国産の輸入陶磁器が山城、集落跡などからたくさん出土しています。17世紀になって肥前の有田で初めて国産化される磁器は、本県では小峰焼（延岡市）など、肥前陶磁器の影響を受けた窯がきづかれて、碗や皿などの日用雑器が生産されました。これらの製品には、草木、山水図など日本的な意匠が描かれ、素朴でほのぼのとした庶民的な味わいを醸しだしています。

（近藤）



中国から輸入された染付絵皿（16世紀）
〔野尻町角内出土〕



中国から輸入された青磁稜花皿（16世紀）
〔野尻町角内出土〕

「日向の山村生産用具」 — 重要有形民俗文化財に指定 —

「日向の山村生産用具」(2260点)が、国の重要有形民俗文化財に指定されました。

資料は、開館以来収集を行うなか、特に山村の多い本県の事情を考慮し、山村文化を伝える資料を重点的に収集してきたものです。

山村生産用具は、大分類で、自然物採集・山樵(さんしょう)・炭焼・製茶・椎茸栽培加工・狩猟・川漁・焼畑・畑作・稲作・畜産・養蚕・木工・竹工・手仕事・鍛冶・運搬・仕事着・飲食携行・とまり小屋・信仰儀礼の21の分野に分かれています。

宮崎県は、県域の約4分の3が山地です。これらの資料は、その大部分をしめる九州山地で使用された各種の生産用具を集大成したもので山村特有の自給的な生産活動の様相を示すものや照葉樹林の豊かな樹生を利用した生産活動を示すもの、平地農村との交流を示すものなどが含まれ、この地の多彩な生産活動を裏づけるものとなっています。(地村)



収蔵されている「日向の山村生産用具」

幻の大魚 アカメ

スズキ目 アカメ科

1992(平成4)年6月19日午後、中学生の津屋浩憲さんが、延岡市の北川河口付近で釣り上げたのが、アカメ(写真)です。アカメは、目がルビーのように赤く輝くところから名付けられています。大きなものは、全長1.5m、体重40kgに達します。日本では、おもに宮崎県と高知県に分布する日本固有種で、レッドデータブック(日本の絶滅のおそれのある野生生物)では希少種となっています。幼魚は「ハゴ」、10kg以上になると「マルカ」と県内では呼ばれています。ゆうゆうと泳ぎ回り、小魚類をひと口に飲みこむところなど、どう猛な面を持っていますが、その生活状態や産卵場所など不明なところが多く幻の魚と言われる由縁となっています。(岩崎)



全長 95cm、
体重 13.5kg

埋文講座

「遺跡をたずねて」

埋蔵文化財センターでは、毎月第4土曜日の午後2時30分から3時30分まで2階の研修室で、県内の発掘調査の最新の成果と現在までの研究の成果について、スライドや土器などを使って紹介する埋文講座「遺跡をたずねて」を行っています。

前回の4月24日には「古代のよろいとかぶと」をテーマに東 憲章主事（県文化課）が講師で、島之内地下式横穴墓や六野原地下式横穴墓出土の甲冑を見ながら、南九州における古墳時代社会の一面について考えてみました。40名もの受講者があり、満席の状態、種々な質問がでて盛会でした。

次回からのテーマは次のとおりです。

- 5月22日 「高千穂バイパス遺跡群の調査」
6月26日 「宮崎の遺跡を知る～平成4年度に発掘調査された日向の中世山城～」

- 7月24日 「古代の色彩Ⅰ～呪術から芸術へ」
8月28日 「古代の色彩Ⅱ～古代の装いに見る色～」
9月25日 「田代ヶ八重遺跡の調査」
10月23日 「弥生の家～花びらの形をした家」
11月27日 「弥生の鉄器」
12月25日 「平成5年発掘調査速報」
1月22日 「内野々遺跡の調査」
2月26日 「須恵器のはなし～陶磁器のはじまり～」
3月26日 「埴輪のはなし～下北方のはにわ～」

5月22日・9月25日・1月22日の場合はそれぞれコーナー展を見ながら、その遺跡について考えてみます。なお6月26日の「宮崎の遺跡を知る」だけは県民文化ホールで午後1時～4時に行いますので注意して下さい。

受講料は無料で、事前の申し込みも必要ありませんので、気軽に受講してください。

問い合わせ等については埋蔵文化財センターにお願いします。（☎0985-26-2634）（長津）

6月から8月の催しもの

	6月	7月	8月
※特別展	6/12	ジュネーブ・パレ美術館名作展	7/18
※コーナー展示			
自然史		宮崎のコメツツジ類	7/25
考古		中近世の器	7/27
歴史		宮崎の歴史をつくった人々 ―小村寿太郎―	世界の大型甲虫
民俗		くらしの中のあかり	8/22
美術		木原晴人展	7/18
埋蔵文化財センター		高千穂バイパス遺跡群（高千穂町）の調査	8/6
西都原資料館		古鏡	6/27
		6/30	鏡と刀
※普及活動			
●博物館……森の学習会	6/26	「宮崎の遺跡を知る」、7/28「石器に見る古代人の知恵と技術」、8/11「瑛九の銅版画」	
	博物館自然教室	7/22、7/23「標本作成教室」、8/29「採集作品の名前を調べる」、6/8、7/13「野外調査会」	
●県民文化ホール……森の名画座	8/26	「ネバーエンディングストーリー」	
	森のコンサート	8/7「東京芸大生による音楽の夕べ」	
●埋蔵文化財センター……埋文講座	6/26	「宮崎の遺跡を知る」、7/24「古代の色彩Ⅰ」、8/28「古代の色彩Ⅱ」	